

# 青年海外協力隊マレーシア会

## 会報 第10号

発行 2016.12.15

### ボルネオへの恩返しプロジェクト

旭山動物園 園長 坂東 元

2007年夏、旭山動物園は想像もしなかった来園者が押し寄せていました（2007年度304万人）。経済的な成功が大きく取り上げられ、経済界や政治家の視察も相次いでいました。

これが「成功」なんだろうか？そんな漠然とした不安が常に頭をよぎる中、ゼリ・ジャパン（現在のボルネオ保全トラストジャパン）の代表、坪内俊憲氏から「オランウータンの施設の見学と、少し話がしたい」とのアポがありました。世界を股にかけ野生動物の保全に尽力されている人で、フィールドをやっている人は動物園否定論者が多いので「動物園否定論者かな？」そう思いました。ヒトがあふれるオランウータン舎の前で簡単な挨拶の後「動物園は動物を使ってお金儲けをする場所なのか？ボルネオオランウータンは絶滅危惧種なのは知っているのか？」「命を預かる動物園だからこそ保全活動をしなければいけないのではないか！ヨーロッパやアメリカの動物園はやってるぞ！」。カチーン！ときました。売られた喧嘩は買ってやろう！そう思いました。

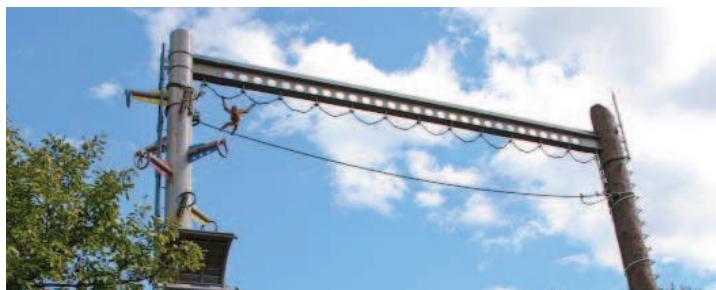
動物たちの豊かさを奪い続けて、私たちの暮らしの豊かさがあること、動物園で楽しかったり優しい気持ちになれたことを、自分のためだけのことで終わらせてはいけないんだ、「恩返しプロジェクト」の発想はこのときに浮かびました。「是非一度ボルネオに来て現状を見てください」坪内氏に言われ「行きます」と即答していました。霧が晴れたような気分でした。

2008年1月マレーシア国ボルネオ島、サバ州サンダカンに降り立ちました。どんよりと曇り、ひたすら雨が降り注いでいました。車で目的地のキナバタンガン川に向かいました。キナバタンガン川流域は、欧米人には人気の観光地です。豊かな自然、ボルネオゾウ、ボルネオオランウータン、テングザル、サイチョウ…たくさんの野生動物たちを見るのが目的です。目的地の船着き場に着くまでの3時間、変化のないアブラヤシのプランテーションが続きました。異様な景色でした。見えない必需品と言われるパーム油を生産するために拡大し続けるプランテーション、絶滅危惧種が増え続ける原因だとは知っていましたが、現実の景色に圧倒されました。ボートに乗り換えて陸路のない宿泊地に向かいました。景色は一変しました。ジャングルです。道路が作れると言うことは人が利用できる場所、そこにはもうジャングルは存在しない。陸路が作れない雨期には水没してしまうような川岸だけにジャングルが残っている。

サバ州は北海道と同じくらいの面積、世界自然遺産キナバル山をはじめラムサール登録湿地など自然を売りにした観光と、パーム油や森林資源などの一次産業が経済の中心…など多くの点で北海道と基盤が似ています。畑と自然林の境界がいきなり隣接している点もそっくりです。そして当然野生動物による農業被害も同じ構図です。害獣の代表がボルネオゾウとオランウータンです。彼らの未来はさまざまな情報や今後の見通しなどから約20年後には野生下絶滅の運命が待ち受けています。特にボルネオゾウはほぼすべての個体がサバ州にのみ生息し、約1200頭と言われています。

キナバタンガン川をボートで下り宿泊地に向かいました。ジャングルが続くかと思えば不意にアブラヤシの木が川岸まで植えられています。ほんの数メートルの標高差の違いの結果です。

プランテーションに囲まれた薄っぺらなジャングル、しかし一步足を踏み入れるとそこは、命があふれています。サルの仲間だけでもニクイザル、ブタオザル、テングザル、リーフモンキーの仲間、ミューラーテナガザ



ル、ボルネオオランウータンを、ほんの数キロの移動の間に見たり鳴き声を聞けたりします。ボルネオゾウの糞や歩いた痕跡も至る所にありました。動物園で飼育をしていると一頭あたりどのくらいの量の食料を必要とするのか見当がつくので、このジャングルには一体どれだけの包容力があるのだろうか？熱帯は新たな命（種）が生まれる場所、この圧倒的な包容力がいい加減さを認め新たな種が生まれ続ける原点なのだと感じました。ただこのジャングルのバランスは限界ギリギリなのではないか？とも感じました。

川沿いには、小さなプランテーションや漁を営む人たちが点在して暮らしていました。この川にはイリエワニがいて今年も何人か襲われてしまったと聞きました。僕も滞在期間中に何度も姿を目撃しました。他にもニシキヘビ、キングコブラを頂点とする多種の毒ヘビが生息しています。これらいわゆる危険動物を排除せずにヒトの暮らしがあることに気づきました。そして皆スマホを使いこなしているのです。私たちはスマホを持つまでの近代化する過程で、都合の悪いものは排除し、その結果自然との接点をなくし、自然を感じる感性を失ってきました。自然はいつか自分たちの暮らしの外の世界になりました。イリエワニと共に生き残る最先端のスマホを使いこなす、とてもない魅力を感じました。

ジャングルを離れコタキナバルで野生生物局の局長と話す機会をいただきました。オランウータンについてはセピロックに保護施設があり十分とは言えないが州政府として保護、野生復帰などのシステムが機能している。問題はボルネオゾウだと言って一枚の絵を見せられました。ボルネオゾウの保護施設のイメージ絵でした。ボルネオゾウによるプランテーションの被害は甚大だが、保護政策をとっているので駆除はできない。政府としてはプランテーションに入ったゾウを捕獲してジャングルに戻すしかないが、林業との関係もあり戻すジャングルも簡単には見つからない状況で捕獲すらできないことが多い、結果、暗殺も起こっている。一次的に収容する施設が必要なんだと説明を受けました。局長に「力を貸してくれないか」と言われました。

日本はパーム油のほとんどをマレーシアから輸入しています。家畜、ペットの飼料からヒトの赤ちゃんの粉ミルク、植物油脂と表記される油の大部分、化粧品、洗剤…パーム油がないと日常生活の根底が成立しません。その消費量は日本人一人がマレーシアに 10 平方メートルの畠を持っていることになります。

恩返しプロジェクトは、動物園で動物を見て優しくなれたり楽しかった気持ちや、日常生活の中でいただきますと感謝する気持ちを、その場で終わらせるのではなく、ありがとう形にしてボルネオに届けよう、がコンセプトです。2010 年に正式にサバ州政府と覚え書きを交わし、旭山動物園がボルネオゾウをはじめとした野生動物のレスキューセンターを設計建築すること、資金調達や、教育普及活動をすることとしました。日常生活が動物たちの未来を奪っているのですから、日常生活の中から持続可能な手段で恩返しをできる仕組みを作らなければと発想し、キリンビバレッジさんの協力を得てドネーション型の飲料水の自動販売機を作りました。現在「うちにも置きたい」そんな声が広がり日本中で 200 台近くが稼働し、寄付も含め年間 1300 万円くらいの活動資金を得られるまでになりました。

2010 年にボルネオゾウ救助輸送用の檻を旭川で製作し現地に送りました。そして 2015 年にはキナバタンガン川流域の野生生物局所管の保護地 LOT8 にレスキューセンターの第一弾を完成させました。フィリピンのアブサヤフが上陸して一時戦闘が起きるなど、現地入りすら大変な覚悟が必要でしたが、大成建設さんの全面バックアップを得て、現地の施工業者さんも熱意を持っていただき完成することができました。昨年の 3 月に最初の保護ゾウが運ばれてきました。運用面での資金が不足していることもあります、決して順調とは言えませんが、一時的に命を留める活動はスタートを切りました。マレーシア国としては国家事業であるボルネオゾウサンクチュアリーの

第一期施設として位置づけています。さらに 2016 年、ダイハツ自動車工業さんが、僕的には日本の最高傑作である軽トラック 3 台を恩返しプロジェクト支援の目的で旭山動物園に寄贈していただき、6 月に現地に届けました。

20 年後の未来に、ボルネオゾウがジャングルの中で暮らしていく、20 年前に北海道の旭山動物園がこんな活動を初めてくれたことがきっかけで今があるんだよ、その時初めて旭山動物園がオランウータンの命を預かっていたことが本当の意味を持つのだと信じ、道なき道を進み続けていきたいと考えています。



# マレーシアにおける障害者福祉関係のボランティア派遣の変遷

四方照美 (H6-1 理学療法士、現在 JICA マレーシア事務所勤務)

マレーシアにおける障害者福祉分野へのボランティア派遣は、1976 年に始まり、現在までに 220 名に上っています。40 年にわたり途切れることなくこの分野での派遣が続いているのは特筆すべき事項です。本稿では今までの派遣の推移を振り返って、少し考察を加えてみました。

まずこの 40 年を 3 つの区分に分けます。

**1976-1990 :** NGO や国立の障害者施設が主な派遣先でした。

ボランティアは保護収容の名の下で、人権が無視されたり隔離されて自由を奪われている障害者のためにできることを模索しました。



(特別支援学級で参加型の活動の取り組み)

**1990-2004 :** WHO が提唱する地域に根差したリハビリテーションを社会福祉局が実施しはじめ、関連分野の隊員派遣開始、施設への派遣は縮小していきました。しかし要請内容は、リハビリ、教育重視で、地域の人々の一員として生きていくための社会参加支援はまだ重視されていませんでした。

**2004-2016 :** 障害者が地域で生きていくための直接支援を促進するため、ソーシャルワーカー派遣を開始し、社会参加を促すため体育や青少年活動などの多様な職種が派遣されるようになりました。ボランティアは、就学や就労などの地域社会参加支援を積極的に行うようになりました。

先進国での障害者福祉においてもこのような 3 つの世代を経て現在に至っています。1940 年代ごろまでの保護収容の時代、次に戦後の（戦傷者が多く出たため）リハビリ、機能回復によって社会復帰を目指した時代、その後の第 3 の福祉、障害に関わらず権利・社会参加を保障していく時代、この潮流に、少し遅れながら



(トレングスの特別支援学級から日系の企業で実習、就労に結び付いた生徒)

もマレーシアの発展に伴ってボランティアは草の根レベルで支援を進めています。制度が整わない中で、ボランティアが派遣される経済発展の遅れた地域で、障害者を保護するのではなく、自立を支援することは、現在でも多くの困難があります。時には家族にさえ賛成してもらい難い支援を、ボランティアは同僚などと地道に行ってきました。同分野へのボランティア派遣が続いていることにより、多くの関係するマレーシア人が日本での研修を受け、また 2005 年から 10 年間は技術プロジェクトが実施され、社会参加支援実現のための制度や政策も作られました。



40 年のボランティアによる支援をきちんと調査しながら分析し、その意義と役割を見なおしてまとめるような研究は価値あるものだと思います。どなたかいかがでしょうか。



(視覚障害者の自立をめざし鍼灸マッサージ技術の指導をする SV、本人も視覚障害)

# 現地における 3R などリサイクル推進活動報告

小手川 雄樹 (H26-4 環境教育)

## ・自己紹介

平成 26 年度 4 次隊として民間連携制度を利用した凸版印刷株式会社の海外研修として、2015 年 3 月から 2016 年 3 月までの 1 年間、クダ州アロースターの廃棄物管理清掃会社で環境教育の仕事に従事しました。（横山さんの後任で、現在、金本さんが活躍中）



アロースター郊外に広がる田園風景

## ・クダ州アロースターについて

タイ国境に接するクダ州の州都で人口は約 36 万人。日本でも有名なマハティール元首相の出生地でもあります。また州の王様は現在マレーシア国王です。街にはイオンやテスコなどのショッピングモール等があり通信も 4G 回線が繋がるので生活で困ることはあります。

## ・配属先 SWCor (廃棄物管理清掃公社) アロースター支社について

私の配属先は、Solid Waste Corporation (廃棄物管理清掃公社) です。日本でいうところのゴミ行政を担っている組織で、ゴミの回収や最終処分場プロジェクトへの参与、不法投棄削減オペレーション、側溝清掃、リサイクルの推進などを行っています。全国組織ですが、私はそのクダ州の州都アロースターの支社で活動をしていました。

## ・活動内容について



民族衣装で

私が所属していたセクションは、リサイクル推進と環境に関する意識向上をミッションとしているため、3R に関する展示会や学校での講演を行ったり、生ゴミから有機肥料をつくるコンポスト作製法を教えたりしています。マレーシアでは 2015 年 9 月からリサイクルのための家庭ゴミ分別回収が始まります。日本ではすでに一部地域で分別回収を行っていますがマレーシアでは初めてのことなので、その周知も重要な仕事です。

アロースターでは、とても気さくでフレンドリーな人が多く、職場や家の近くを歩いているとみんな笑顔で挨拶してくれます。また、私がマレー語を話せることが分かると、とても喜んでくれ、マレーシアに来てよかったです。

また、イスラム教の中での生活において、聞いたり読んだりする話と、実際に生活してみて得た情報は大きく隔たりがあり、貴重な経験ができたと実感しました。

**民間連携ボランティアとは** 企業の若手社員や管理職の育成のために青年海外協力隊、シニア海外ボランティアへの参加を検討している企業からの問い合わせが増えています。事業の新興国への展開、開発途上国を対象とした BOP ビジネスへの関心の高まりなど、企業活動がグローバル化する中、それに対応するためのグローバルな視野や素養を備えた人材の確保も喫緊の課題となっています。

JICA ではこのようなニーズに応えるよう、企業と連携してグローバル人材の育成に貢献するプログラム「民間連携ボランティア制度」を創設しました。（JICA ホームページより抜粋）

## 現役ボランティア便り

<ボランティア総会を開催しました>



平成 28 年 7 月 19 日(火)JICA マレーシア事務所にてボランティア総会を開催いたしました。この日は在マレーシア日本国大使館より中村参事官にお越しいただき、冒頭のご挨拶で「最近、マレーシア国内ではテロ問題で緊張状態が続いておりますが、ボランティアの皆さんには益々ご活躍いただき現地の人々と共に頑張ってほしい。」と激励の言葉を頂戴いたしました。その後に平成 28 年度 1 次隊の新隊員を交えて自己紹介を行い、26 名の隊員一人ひとりとも個性的な自己紹介で会場は盛り上がりま

した。午前のプログラムの二つ目は福祉・環境・教育&職業訓練の 3 分野から加藤 JV・玉虫 JV・中鉢 JV が代表してそれぞれの分野について中間報告をしていただく予定でしたが、突然の停電の為に急遽プログラムを変更し、ボランティアの会会則の変更、ボランティアルームの管理、普段の生活を感じたヒヤリハット体験についてボランティア間で共有を行いました。昼食休憩中には福祉製品の販売・手工芸品の販売会を実施しました。午後は予定を変更した中間報告会を実施し、その後に「組紐」のアクティビティを実施し



ました。多くの隊員が現地の方々より日本の文化について尋ねられる事が多い中で、日本伝統の工芸品の一つである組紐について取り組み、日本文化に限らず各々の分野で今後の活動に活用できる技術を学ぶ良い機会となりました。



**青年海外協力隊マレーシア派遣の50年（後編：1988～2015）**

西暦	局長	首相	マレーシアの協力隊のできごと／マレーシアの動き	協力隊事務局の動き
1988	中村武			
1989			竹下登総理、訪マ。隊員と懇談。	応募者年令を39歳に引き上げ ラオスへの派遣再開
1990			サバ村落開発プロジェクト最終評価調査団派遣 マレーシアヘシニア協力専門家赴任 FELDA民営化方針、隊員の派遣終了へむかう シンガポール、リーケンヌー首相辞任、後任はゴーチョクトン首相 マハティール首相EAECを提唱	シニア協力専門家派遣制度(現シニア海外ボランティア)開始 移住シニア専門家制度(現日系社会シニアボランティア)開始 隊員派遣累計が1万名を突破
1991	青木盛久		事務所はJln.Raja Laut のWisma Sime Darby スプラン・ペラ稻作セミナー開催(5年にわたるFELCRAと協力隊のス プラン・ペラ開発プロジェクト) 天皇・皇后両陛下マレーシア訪問 海部総理来マ、隊員代表激励 ワワサン2020の発表	ペルーでの反政府テロ事件
1992		マハティール・ビン・モハマッド	FELDAでの協力活動終了 レジデンシャルスクールでの日本語教育中間報告	旧社会主義国への協力隊派遣開始 (モンゴル、ハンガリー、 ポーランド、ブルガリア、ルーマニア、キリギス、ウズベキスタン) カンボディアへの派遣再開(派遣中止となって22年ぶり) 隊員の配偶者及び子女の一時呼び寄せ制度、制定
1993			マレーシア初の格安航空会社エア・アジア設立	
1994	高橋昭		クアラルンプール新国際空港建設工事(円借款)	二本松訓練所開所開所
1995			この頃1マレーリングットは50円	協力隊創設30周年
1996				協力隊事務局が広尾からJICAのあるマイズタワーへ移転 「シニア協力専門家」を「シニア海外ボランティア」に名称変更 駒ヶ根・二本松両訓練所が協力隊事務局からJICAの付属機関となる
1997	望月久		ペトロナスツインタワー完成 アジア通貨危機タイバーツ下落 その影響でマレーリングットも下落	
1998			LRT Star 全線開通 KLIA開港 1マレーリングットが30円に	協力隊女性隊員が男性隊員を上回る
1999			JICA KL事務所がYap Kwan Sengから現在のCity Bankビル(当時 Menara Lionビル)へ移転 新行政都市、ブトラジャヤに首相官邸を移す ペトロナスツインタワー、グランドオープン	
2000	金子洋三		隊員連絡所がSuCasaへ移転	隊員派遣累計が2万名を突破 JOCVNEWSのデジタル化
2001			レジデンシャルスクールへの日本語教師派遣終了 LRT Putra全線開通、KLセントラル開業	『青年海外協力隊20世紀の軌跡1965～2000』発行 国際ボランティア年
2002			コタキナバル事務所閉鎖 友好姉妹都市シニアボランティア制度設立、イポー市と福岡市が人材育成支援で協力	隊員連絡所運営ガイドラインを策定 現職教員特別参加制度開始 「21世紀のJICAボランティア事業のあり方あり方」報告書、完成
2003	アブドラ・パダウイ		アブドラ・パダウイ、第五代首相となる KLモノレールの運行開始	国際協力機構(旧国際協力事業団)発足、緒方理事長就任
2004			スマトラ沖地震	ネットからの協力隊応募者が過半数を超える
2005			福祉、環境教育、職業訓練を中心に派遣	協力隊創設40周年 広尾訓練所、最後の訓練一閉所(→地球ひろばへ) JICAポータルサイト始動
2006	大塚正明		隊員連絡所がZon Hotelへ移転 マレーシアで第9回極東・南太平洋障がい者スポーツ大会(FESPIC) が開催、多くの隊員・SVが開催を支援して活動 ジョホールにイスカンドール開発特別区	元広尾訓練所あとにJICA地球ひろばが開設
2007			ボルネオフェーズ2	青年海外協力隊とシニア海外ボランティアの合同訓練開始 隊員派遣累計が3万名を突破
2008			隊員連絡所がVista Damaiへ移転 マラッカ、ジョージタウン(ペナン)が世界遺産になる	国際協力機構は国際協力銀行の一部と統合、新JICAへ 協力隊とシニアの訓練を合同にして65日間訓練となる JICAボランティアポータルシステム始動
2009	伊藤隆文		総選挙敗北の責任をとり、アブドラ・パダウイ首相辞任、 ナジブ、第六代首相となる。1 Malaysiaがスローガンに	JOCV NEWSがJICAボランティアNEWSへ移行
2010			PUDU刑務所取り壊し この年のKL人口160万人	民間連携事業の展開
2011		ナジブ・ラザク	新しいイスタンガがJln.Dutaに完成 マレーシア政府観光局によるルックマレーシアプログラム	東日本大震災被災地への一時帰国隊員による復興支援活動参加
2012	武下悌治		6月 マレーシア日本国際工科院(MJIT)開校式 7月 Vista Damaiの隊員連絡所(KL)閉鎖	民間連携ボランティア制度新設
2013			第13回総選挙、政権交代が取りざたされるが与党勝利 一人当たりのGDP:10456USD、人口2972万人	元広尾訓練所(当時地球ひろば)国庫返納のため閉鎖 復興庁が協力隊経験者を東日本大震災被災地自治体へ派遣
2014			ヘイズの影響が大きくなる(KL市内131校が休校)	
2015	小川登志夫		サバ地震	隊員派遣累計が4万人を突破 協力隊創設50周年
2016			マレーシア青年海外協力隊派遣50周年記念式典がKLで開催	

(前編掲載の駐在員・調整員欄については、1989年以降の組織変更に伴い記述できませんでした)

## 「北海道集会」開催!!

地区集会（関東地区以外）の第1回は、2014年3月に東海地区の名古屋市で開催された。今回は、2回目として北海道地区の札幌市で下記の要領で開催された。開催に向けての企画・立案及び実施は、北海道地区的世話人である金子正美氏（北海道酪農学園大学教授・北海道青年海外協力隊を育てる会会長）を中心に、マレーシア会が主催した。

### ☆青年海外協力隊マレーシア会北海道集会☆



主催：青年海外協力隊マレーシア会

共催：北海道青年海外協力隊を育てる会

後援：一般社団法人「協力隊を育てる会」

日時：2016年6月12日(日) 午後3時～6時

場所：北海道大学 学術交流会館 1階第一会議室

基調講演：旭山動物園園長 坂東 元

-----プログラム-----



3:00～3:05 挨拶 マレーシア会会長 白山肇

3:05～3:15 主旨説明 北海道青年海外協力隊を育てる会会長 金子正美

3:15～4:15 基調講演；「ボルネオへの恩返しプロジェクト」 旭山動物園園長 坂東元氏

4:15～5:15 スライド上映会；「あの時の私とマレーシア」 村上・前島・金子の3氏

5:15～5:45 懇談

参加者は約70名、マレーシア会からは13名。内訳は道外から白山、前島、高橋(明美)、志岐、村上、吉田朱美夫妻の7名、道内からは金子、菊田、浅野夫妻、垂水秀俊、奥山の6名であった。当日は、よさこいソーラン祭りの最終日でもあり、ソーラン祭りも見学できた。



### 基調講演要旨

坂東元 旭山動物園園長

ボルネオへの恩返しプロジェクトの実施者

- 活動の内容!!

傷ついたボルネオ象を元気づけ、

そして森に返す活動。

- 問われていることは!!

環境保全(象の保護)と経済発展(パームオイル生産)は両立するか？という古くて新しい問題。



発表内容は赴任現場での活動報告。  
熱のこもった、そしてユーモアも交えての発表でした。

## グローバルフェスタ 2016 出展

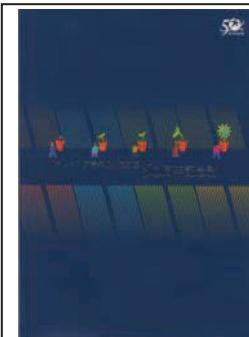
10月1日、2日の2日間、お台場センタープロムナード公園でグローバルフェスタが開催され、マレーシア会も参加。約10万人の来場者がありました。マレーシア会のブースにも高校や大学でボルネオヘ斯塔ディツアーで行った経験のある人など多数訪れてくださいました。またボルネオ森林保全への寄付金もあざかり、日本マレーシア協会に寄付させていただきました。



## K.L発 50周年記念誌!!

JICA K.L 事務所は、「マレーシア青年海外協力隊50周年記念誌」を発行しました。A4版、全92Pカラー刷りの豪華版です。青年海外協力隊マレーシア会は、本出版事業に協力し、写真と寄稿の提供に寄与しました。協力されたOB・OGの方々にこの紙面を借りて感謝致します。

第1章「熱い思いに駆り立てられて」、第2章「歴史」、第3章「共に目指したゴール」、第4章「多様なニーズの多民族社会」、第5章「ボランティアを支える人々」、第6章「そして未来へ」の6つの章から構成されています。また250名の参加のもと、2016年1月11日にK.Lで開催された「マレーシア青年海外協力隊50周年記念式典」の報告が、多くの写真とともに掲載されています。会員の皆様には、本会報10号と一緒に郵送されます。



## ボルネオ保全トラストジャパン

坂東元旭山動物園園長の原稿に出てくるボルネオ保全トラストジャパン代表の坪内俊憲氏は青年海外協力隊昭和55年度2次隊ザンビア派遣の獣医師ですので、ご紹介いたします。

## 会報名募集!

現在、マレーシア会会報としていますが、隊員機関紙のANGINのようなマレーシア会らしい名前をつけたいと思います。奮ってご応募ください。(締め切り 2017年3月末日)

## 訃報

二瓶 始さん (昭和48-1) 2016年4月  
大変残念です。これまでの活動に敬意を表するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

## 寄附のお礼・・ありがとうございました!

金城睦子(59.1)、大西益吉郎(49.2)、岡本省吾(54.3)、岡本則子(55.2)、本作恭子(54.3)、前島明(57.3)、杉山クルミ(58.2)、高橋明美(55.1)、志岐文子(49.3)より合計3万1000円のご寄附をいただきました。活動費として、大切に使わせていただきます。なお、寄附は随時受け付けています。よろしくお願ひいたします。

振り込み先:

郵便局記号: 10140 番号 51611341

(郵便局外から振り込みの場合: 店番018、普通口座 5161134 です)

口座名義人: 青年海外協力隊マレーシア会  
代表 白山 肇

事務局からお願い: 住所、メールアドレスを変更された時は下記連絡先までお知らせください。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と2010年の青年海外協力隊OB/OG会出席者にEメールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在500余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山肇  
162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5  
JICA 地球ひろば メールボックス 51  
TEL: 090-7186-1065 (国際協力サロン)  
MAIL: malaysia@ics-together.com  
URL: <http://ics-together.com/jocvmalaysia.htm>